

# 進む!まいるる!

市政の話題を紹介!

TOPIC 1  
1/21

## ■税の手続きのデジタル化 デジタル化促進宣言式

税務行政のデジタル化をきっかけに、社会全体のデジタル化を官民一体で進めていくため「デジタル化促進宣言式」が行われました。舞鶴市では今後「eLTAX(地方税に関する手続きをネットで行うためのシステム)」を活用し「電子申告」「電子納税」「通知の電子化」「国税などとの連携」の4本の柱を軸に、税務行政のデジタル化を推進します。手続きをより身近で便利なものへと進化させるとともに、業務の効率化と正確性の向上を両立させ、市民と事業者のさらなるサービスの向上を目指します。



TOPIC 3  
2/1

## ■レスリングの普及・振興 舞鶴レスリング大会

競技の普及と振興を目的に「舞鶴レスリング大会」が開催されました。当日は園児から社会人まで34人が出場し、年代ごとに分かれ、熱戦を繰り広げました。近年、舞鶴出身選手の活躍は目覚ましく、全国大会や国際大会でも輝かしい成績を収めています。舞鶴で育ち、世界へ羽ばたこうとする多くの選手たちがさらなる成長を遂げられるよう、今後もレスリング競技をはじめ、スポーツに親しんでもらえる環境を整えていきます。



## 市長からのメッセージ

令和7年度も締めくくりに迎えました。今年度も市民の皆さんと一緒に、数多くの挑戦を形にすることができ、感謝申し上げます。成果と課題を次の一歩へとつなげ、明日への選択肢を導いてまいります。雪解けとともに、希望が持てる春を迎えましょう。



TOPIC 2  
1/27

## ■デジタル分野での活躍を推進 「デジタルマーケティングを学ぶ講座」修了式

舞鶴市では、就労意欲のある人を対象に、デジタルマーケティング分野のスキルアップを支援し、その力を地元企業で生かしてもらうことで地域活性化を目指す講座を昨年9月に開講しました。受講者は子育てや仕事と両立しながら、約150時間のオンデマンド学習と対面授業を含む実践的なプログラムを修了されました。今後は身に付けたスキルを生かし、市内外のインターンシップに参加するなど、幅広く活動されます。



TOPIC 4  
2/10

## ■2040年の舞鶴を考える Special Talk in MAIZURU #みんなでつくる舞鶴2040

カルチャーやビジネス、エンターテインメントの第一線で活躍する大崎洋氏、石川涼氏、中野優作氏と鴨田市長により「挑戦が、街の空気を変える」をテーマに2040年の舞鶴について考える特別講演会が開催されました。挑戦や活動の原動力などを語った後の質疑応答では、若い世代からの質問が相次ぎ、会場は熱気に包まれました。



ブラジルへの単身旅やユーラシア大陸横断、そして大手企業での営業職を経て、現在「ふるるファーム」の取締役として、自然体験や食の魅力を発信している山下さん。「世界中どこでも生きていける」という自信を手にした彼が、なぜ、故郷・舞鶴で挑戦を続けるのか。その原点と目指す未来について伺いました。



ふるるファーム取締役 山下 恭平さん

私は、舞鶴市で生まれ育ち、高校卒業までこの町で過ごしました。私の挑戦の歴史は、中学生時代にさかのぼります。小学生の時に家族旅行で母の故郷であるブラジルを訪れた経験が印象に残り、中学生になると大の昆虫好きだった私は「ブラジルのチョウやカブトムシをこの目で見たい」という情熱を抑えられなくなり、元々半分で「志望校に合格したら、一人で行っていいよ」と言い、私は猛勉強の末に志望高に合格。合格発表の当日にそのまま一人で飛行機に乗り込み、地球の裏側へ飛び立ちました。スマホもない時代でしたが、不安よりも抑えきれない好奇心が勝っていました。「壁を乗り越えてでもやり遂げる」というこの時の経験が今の自分の原点です。



路上パフォーマンスの様子

大学で音楽活動に目覚め、卒業後はプロを目指してバンド活動に明け暮れましたが、27歳で大きな挫折を味わいました。どん底にいた私を救ったのは、友人からの「シベリア鉄道に乗ってスウェーデンへ行こう」という誘いでした。片道の航空券とギターを片手に約100日に及ぶユーラシア大陸横断の旅に出ました。帰りの航空券代もなく、路上パフォーマンスの投げ銭

帰郷後は、飲食や家庭教師などのアルバイトのほか、企業での営業職などを経て、令和4年から地域活性化事業に携わっています。現在は、開園20周年を迎える「ふるるファーム」の取締役として、農業から飲食・宿泊・体験まで施設全体の事業設計とブランドづくりを担っています。野菜作りや加工品開発の他、生きもの観察会やたき火体験などの自然体験までを統合し、大浦の地域資源を生かした観光地域づくりにも取り組んでいます。また、仕事の傍ら、松尾寺

挑戦の原点は「好奇心」

受けた恩をつなぐ「恩送り」

で食いつなぐ日々の中で感じたのは「自分は一人で生きていくのではなく、あらゆる関係性の中に生かされている」ということでした。旅を終えた時「世界中のどこでも生きていける」という自信と、受けた恩を次へつなぐ「恩送り」をしたという強い思いが芽生えました。そして、その場所にはやはり、自分を育ててくれた故郷・舞鶴でありたいと思ひ帰郷を決意しました。

自然体験と伝統文化の継承

舞鶴ならではのリアルな体験を AIが発達し、デジタル化が加速する時代だからこそ、自然に触れる「リアルな体験」が、子ども達の感性を育むと信じています。舞鶴の自然の中でしか味わえない体験価値をさらに磨き上げ、2040年に向けたまちづくりにも積極的に貢献していきたいと考えています。かつて旅先で私が助けられたように、今度は私がこのまちを面白くすることで、次世代へ向けた恩送りを続けていきます。



生きもの観察会の様子

まいるる元気人

Vol.109

世界から舞鶴へ、つなぐ「恩送り」